



埼玉県の先ばい

インタビュー!!!



車いすバスケットボール

東京2020パラリンピック競技大会・男子銀メダル



赤石 竜我さん

(さいたま市出身)

あかいしりゅうが



赤石竜我さんって、どんな人?

赤石さんは、さいたま市出身の車いすバスケットボールの選手だよ。

東京2020パラリンピックでは、チームの最年少メンバーとして銀メダルをとったんだ。

赤石さんは、5さいのときにかかった病気によって車いす生活を送ることになったんだけど、子どもの時は、友だちといっしょに外でドッチボールやバスケットボールをやったり、友だちの自転車に車いすについて行ったりと、外で遊ぶのが大好きで元気な子どもだったんだ。



車いすバスケットとの出会い

Q：赤石さんにとって車いすバスケットとの出会いはどのようなものですか？

A：子どもの時は、車いすの自分がとてもいやでした。体を動かすことは大好きでしたが、50メートル走だとぶちぎりでビリ…。いつもくやしい思いをしていました。

いつか歩けるようになって、スポーツをやりたいという思いがありました。それが、中学生の時に東京パラリンピックが決まってから、「東京パラリンピックに出る」というゆめができました。車いすバスケットと出会って、ゆめや目標ができましたし、何より生きがいがありました。



ちょこっとメモ

インタビューをした時、赤石さんは大学3年生。車いすバスケットと大学生活とどちらもがんばるのはとても大変なんだって。だから、お休みの日は大好きなマンガを1日ゆっくり読んで、気持ちを切りかえているそうだよ。



くる
苦しくても…

くる
Q：車いすバスケットをやっていて苦しいときや
つらいときはありましたか？

A：車いすバスケットを本気でやめようと思ったことが一回ありました。高校1年生の時、同年代の選手が大会に出て活やくしている中、自分が置いていかれているのがすごくつらかったです。

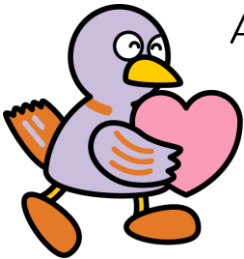


でも、なぜその時やめなかったのかというと、自分の中でゴールを決めたからです。日本代表なんて「ゆめのまたゆめ」のような実力だったので、まずは1年後の大会を目標にしてあと1年だけがんばろう、と決めました。

大きな目標も大切ですが、小さな目標を一つずつ立てていくことで、ここまで続けることができました。

はは
母について

かた
Q：赤石さんをここまでささえてくれた方は？



A：多くのおおの人のささえがありました。その中でも一番ばんをささえてくれたのはははです。人生の中で一番つらかった時を知っているのが母です。母がいてくれたからこそ、今日まで続けることができましたとおもっています。

銀メダルをとったときは、はずかしくて自分の口では伝えず手紙で気持ちを伝えました。母のたん生日に、手紙と銀メダルをずっとわたして…。母も喜んでくれました。

さいたま
埼玉の子ども
たちへ

みらい
さいたま
Q：未来を生きる埼玉の子どもたちへ
メッセージをお願いします。

A：ゆめをかなえるためには、はずかしがらずに口に出してください。ぼくは中学生の時から車いすバスケットを始めましたが、始めたばかりの時から「ぼくは東京2020パラリンピックに出る！」ということを出し続けてきました。

人に無理だと言われたり、うまくいかないこともありました。それでもぼくは口に出し続けてきました。東京パラリンピックでも、「メダルをとる」と言い続け、結果を出すことができました。自分を変えられるのは自分。待っているだけではだめです。みなさんも、本気でかなえたいと思うことは、ぜひ口に出して伝えてみてください。



ちょこっとメモ

車いすバスケット日本代表の合言葉は「一心（いっしん）」。
一人一人の置かれている立場はちがっても、メダルをとりたいという思いでチームの心が一つになったから、今回の銀メダルという結果につながったそうだよ。

